開催地名	鹿児島県阿久根市
開催日時	令和７年 10 月 29 日（水）　13:30　～　15:00
開催場所	風テラスあくね
語り部	井上　達彦（宮城県石巻市）
参加者	阿久根市総務課係長含む職員 6 名 阿久根市内地区長・役員　53 名
開催経緯	各地区長が集まり、災害が発生した時の備えを日頃から意識し、自発的な活動を促す働きかけを意識させるものとして計画。 地区住民の日頃の備えを強化し、明るく住み良い阿久根市を作るための活動の一環として実施したものである
内容	（１）東日本大震災の被害 震災の発生前、発生後における人口の変化、当時の災害の様子を写真や地図を用いて案内。東日本大震災時に人災と言える様な大人の判断ミスが発生、子供達が犠牲になった事があった。高台にあった幼稚園が地震後、津波警報があったにも関わらず、海沿いの街へ向かい幼児を自宅へ返そうとバスを動かしたこと。津波警報をたかが数十センチの高さだろうと過信して避難を急がなかったことなど、人災が原因で失った命があった。自分達の地域にも置き換えて考えてもらいたい。震災直後に感じた日々の備えの大切さ、人々の暮らしを守りたいという思いで、防災士協議会を発足した。 （２）防災計画モデル事業としての取り組み 内閣府が募集した地区防災計画モデル事業として石巻市上釜地区が採用された。大学教授や専門家の話を取り入れて、地区の人々の暮らしを守る為に備えを充実させた経緯を発表。地域の方も参加して問題点を話し合うワークショップや、サッカー協会の協力を得て子供達がサッカーの練習中に災害が発生した場面を想定し、避難ルートや家族との面会について訓練を行った。この中で避難経路において移動ルートの問題点があり、橋を増やし、住民がどの経路を利用すれば安心かを訓練を通して共有した。 （３）自助・共助・公助の考え方 公助である役所に頼ってはいないだろうか。「自分の命は自分で守る」「自分たちの地域は自分たちで守る」という意識のもとに、自助・共助(近助)が重要であることを説明。公助の手が届くのは 3 日～1 週間後であることから、食料品

	や災害対応備品の重要性、近隣とのコミュニケーションなど日頃から自発的に行動できることを紹介。“まさか”を想定した日頃の動きがいかに重要かを強調する。住民参加型でなければ対応できないこともご理解いただくよう説明。震災時、プライバシーのない避難所で公的な援助が遅かった。住民の不満は全て役所へぶつけられたが、自助共助の精神が備わっていれば防げることも多々ある。自分達に置き換えて考えていただくよう意識付けが大切。 （４）自主防災組織の活動と実際の組織図について 大災害が起きた際の組織図を紹介。今回の受講者において女性が１人だけだったことに講演者は驚いていた。女性に頼ることも多い役回りもある。ぜひ防災意識を老若男女問わずに全員で取り組める体制を切に願う。（組織図を用いて各班の活動内容を詳しく説明。）　自分達の地区にも充てて考えていただきたい。 （５）最後に 今講演者の住んでいる地区には 130 名の防災士が所属。毎日誰かが活動を行っている。各事業所、学校の防災訓練、地元 FM 局と月１回のラジオ番組、活動を地元新聞社に取り上げていただいたりした。おかげさまでたくさんの方に防災士協議会の存在を知ってもらえている。災害は起きてからでは遅い、公助に頼っていてはダメだ、日頃から「自分の命は自分で守る」精神と近所の方の助け合いを元に二度と起こさない、災害を最小限に抑える努力を防災意識で確立してほしい。
開催地より	今回のお話を聞いて、今後の活動に繋げていきたい。